

博物館 Dictionary No.235

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。

戦国の地方画家、式部輝忠

式部輝忠は、戦国時代の東日本で活躍した、謎めいた画家です。残る絵にはどれもサインがなく、
「龍杏」、「式部」、「輝忠」と読める3種の印があるだけ。このうち「龍杏」は画号で、ペンネーム
のようなもの。「式部」はたとえば紫式部、和泉式部のような名が連想されるでしょうか。朝廷に
勤めた人の古い肩書の一つで、関係のある人や、京都にあこがれのある人たちが使いました。最後
の「輝忠」は、いかにも名前のようにみえます。ということで正式な本名ではないのですが、私
たち研究者はとりあえず彼を式部輝忠と呼ぶことにしています。

この輝忠、歴史の資料には、ほとんど現れません。ただ一点、戦国時代末の1557年（弘治3年）、
大名の今川義元が住む駿府（静岡県静岡市）に画家「式部」がいたという記録があり、おそらく
彼こそが輝忠だと考えられています。それによれば、奈良生まれの人だとか。彼はいつ故郷を離れ、
なぜ駿府に来たのか？ 詳しいことは分かりません。

文字の資料に代わって、繊細かつクセの強いその絵が、輝忠の人生の歩みをいくらか教えてくれ
ます。まずいくつかの作品に、戦国時代の鎌倉（神奈川県鎌倉市）に住み、東日本で一番の画家だっ
た祥啓の描き方をまねるものがあります。祥啓は京都で最新の絵を学び、鎌倉に戻って多くの弟子
を育てた人。輝忠はかなり若い頃に関東に来て、祥啓か、その弟子のもとで学んだようです。



図1 重要文化財 巖樹遊猿図屏風（左隻）
むろまちじだい 16世紀 式部輝忠筆 京都国立博物館蔵
展示期間：2024年6月18日～7月28日

当時の関東・甲信越地方には北条家に武田家、

今川家、上杉家、佐竹家……名をとどろかす

戦国武将がひしめいていました。彼らはみな

京都の権力者となつたり、すぐれた文化を求

めていましたが、都に上る機会のはめったになく、

また都の最新の芸術もそう簡単には入ってきません。

そのため武将たちは地元で活躍する画家にも注目しており、

その中で特に今川義元に目をかけられたのが輝忠だったの

かもしれません。

輝忠はやがて身につけた祥啓のスタイルを大きくアレンジし、岩や植物の線や形に、三角形や菱
形、直線、半円などの幾何学パターンを複雑に組みあわせた表現を試しはじめます。タッチは繊細で、
時にすさまじい集中力を感じさせ、個性にあふれています(図2)。

京都国立博物館の「巖樹遊猿図屏風」は、大小たくさんのテナガザルが画面いっぱいにはしゃぐ、
代表作(図1)。岩は丸みがありモコモコとして、特に下の方は鍾乳石のように垂れさがっています。
この不思議に垂れる岩も、雪村という今の茨城県出身の大変面白い画家が得意にした描き方で、輝
忠の拠点が関東だったことを教えてください。

輝忠のデッサンの正確さ、タッチや陰影の繊細さは、まるで京都の一流の画家のようです。もし
かすると奈良から関東に来る前、都にもいて、幼いころからゆるぎない基礎を身につけていたのか
もしれません。移住のあとも、京都に絵を学びに行ったのかもかもしれません。先ほど見た猿の屏風は、
岩の形は関東の画家ならではですが、柔らかく伸びやかな全体のタッチはむしろ京都の画家、特に
都で一番力を持っていた狩野派の最新の描き方になっています。輝忠のように地元の流行をしっか
りと受け止めながら強い個性をみがき、なおかつどこに出しても恥ずかしくない都会風の絵に仕上
げることができた地方画家は、この時代ほんとうに貴重でした。関東と京都、両方の文化を感じさ
せる絵の雰囲気。そして輝忠とゆかりがあったという奈良や駿府といった地名から、彼がフットワー
ク軽く旅をして、いろいろなものを吸収する画家だったことが想像できます。やたら細かいタッチ
へのこだわりは、少し神経質な人柄も感じさせるのですが。

輝忠がいつ頃亡くなったのかはわかりませんが、世を去って数十年くらい後の江戸時代の初め、
17世紀前半には忘れ去られ、もう彼の名を出すものはいませんでした。しかし絵はたくさん残され、
日本のほかアメリカやドイツなど各地で数十点も発見されています。出来ばえがよく、大事にされ
たのです。もしかしたら生前は、少なくとも東日本では知らぬ人がいないほどの偉大な画家だった
のかもかもしれません。今はただ絵だけが、彼の人となりをしるばせています。



図2 漁舟山水図扇面

むらまちだい 室町時代 16世紀 式部輝忠筆

展示期間：2024年7月30日～9月8日

(美術室 森道彦)